

# 愛知登文会ニュース 第32号

令和4年4月25日号

## 1 事業実施報告「登録文化財保存活用シンポジウム」(2021年度)

第2回は会場とZoomの併用開催、第3回はまん延防止等重点措置期間を考慮しZoom開催のみとしました。

### 第2回 「文化財建造物の保存活用」

文化財建物の管理だけでなく、文化や技術の保存・継承にも取り組む施設として2つ事例を取り上げました。古川美術館の伊藤氏からは、爲三郎記念館での様々な取り組みについて人との出会いという切り口からご紹介いただきました。LIXILの後藤氏からは、東京駅丸の内駅舎をはじめとするタイル復元事例について、実物の化粧煉瓦を用いながらご紹介いただき、意匠の再現以上に施主の思いやそれに応えようとする当時の職人の気概に立ち返る姿勢が重要ということ学びました。

R3.12.7(火)	内容	参加者
14:00~ 16:30	①爲三郎記念館の活用と維持管理ー登録文化財の活かし方ー 講師：伊藤洋介氏（公益財団法人古川知定会 事務局長） ②文化財建造物を彩るタイルの魅力 講師：後藤泰男氏（株LIXIL INAX ライブミュージアム 主任学芸員） ③意見交換 コーディネーター：小栗宏次（愛知登文会会長）	33名 (講師・事務局含む)



▲伊藤氏による古川美術館の取り組みの紹介



▲後藤氏による復元事例の紹介



▲意見交換の様子

### 第3回 「歴史的建造物の魅力とその活用」

建築施工に携わるお二人にそれぞれの企業・協会の取り組みをご紹介いただきました。北川組の北川氏からは、創立150年の数々の歴史の中から、東山公園の新築や名古屋市役所の増築工事など様々な実例を貴重な史料とともにご紹介いただきました。古民家再生協会の戸田氏からは、古民家の活用事例を使用資金とともに紹介いただいたほか、古民家の海外へ移築した事例から、日本の大工の評価や伝統工法を継承することの大切さについてお話しいただきました。

R4.2.14(月)	内容	参加者
14:00~ 16:30	①文化財のルーツを語る 講師：北川隆志氏（株北川組 代表取締役社長兼会長） ②地方の課題 空き家古民家を負動産から富動産へ 講師：戸田由信氏（一社愛知県古民家再生協会 理事長/株戸田工務店 会長） ③意見交換 コーディネーター：小栗宏次（愛知登文会会長）	49名 (講師・事務局含む)



▲北川組創立150年記念誌



▲古民家の海外移築事業の紹介



▲意見交換の様子

## 2 事業実施報告「登録有形文化財魅力紹介冊子」(2021年度)

2018年度からの継続事業。県内の登録有形文化財を紹介する冊子「あいちのたてもの」を制作しています。

### 「あいちのたてもの すまい編」

「ものづくり編」「まなびや編」「いのりのば編」に続く4冊目は、住宅をテーマにした「すまい編」。住宅は私たちの一番身近な建物でありながら、その歴史は深く、意匠や様式は個性豊かでおもしろいです。制作にあたっては、各所有者・関係者の皆さん、腕の良いカメラマンの方々にご協力いただき、文章は建築史家の村瀬さんに執筆いただきました。豪華な写真の数々や図解ページも必見です。

この冊子は会員の皆様に配布したほか、愛知、岐阜、三重、静岡、東京、大阪、京都の各図書館に寄贈させていただいています。ぜひお手に取ってご覧ください。また、当会ホームページでも公開中です。



すまい編の表紙とサイズ感



食に関する特別ページ

## 3 事業実施報告「文化財案内自動応答システムの開発」(2021年度)

2020年度からの継続事業。昨年度の「愛知登文会 LINE 公式アカウント」の公開に続き、文化財の所有者が自らの取り組みを広報するツールとして、文化財所有者による情報投稿 Web アプリを開発しました。

### 自動応答システムへの機能追加

愛知登文会情報担当 小栗真弥

情報担当の小栗真弥です。愛知登文会では2020年度の事業でLINE公式アカウントを活用した情報発信に取り組んでおりました。これは圧倒的普及率を誇るLINEのプラットフォームを利用して愛知登文会の取り組みや情報を共有していくものです。また自動応答機能によって24時間いつでもLINEで文化財情報を照会したり最寄りの文化財情報を教えてくれたりなどしました。

さて、従来のシステムでは返信する情報は登文会の事務局側が更新することを前提としていますので、文化財所有者の方が宣伝したいような内容を流すことは基本的にはできていませんでした。そこで2021年度事業として、この自動応答システムに機能追加ということで、イベント情報を返信するための仕組みを導入しました。これは、登録文化財の所有者の方々にそれぞれアカウントを発行し、それぞれがPRしたいイベントや近況報告などを投稿して共有することができるシステムを目指して開発をしました。このシステムの導入によりFacebookへの投稿も同時に行うことができるようになりました。

まだまだ使いづらい部分などもあるかとは思いますが、少しずつ改良を重ねて参りたいと思いますので、ご意見やご感想など気軽にお寄せください。またわからないことなどあればサポートさせていただければと思います。このように常に先端の取り組みにチャレンジしていく愛知登文会をどうぞ応援していただければ幸いです。

また、私ごとではありますが、情報担当をさせていただいております小栗真弥がこの春より愛知工業大学の助教として着任しました。文化財活用のための情報メディア技術の開発を掲げて、今後も研究・仕事として本格的に取り組むつつ愛知登文会へ貢献できればと思っております。

### 文化財所有者による情報投稿 Web アプリの使い方

<p><b>スマホの方</b> (LINE公式アカウント※より)</p>	<p><b>PCの方</b> (Webブラウザより)</p> <p><a href="https://aichi-tobunkai-sys.org/">https:// aichi-tobunkai -sys.org/</a></p> <p>※ LINE 公式アカウント ぜひ友達登録おねがいします！ 533rydvi で ID 検索 または QR コード読み込み</p>	<p><b>投稿希望の所有者の方は</b> 以下よりご連絡ください</p> <p>投稿のための専用アカウントと 操作方法マニュアルをお送りします。</p> <p><a href="https://forms.gle/WkRQGPRRiEC8ye9t8">https://forms.gle/WkRQGPRRiEC8ye9t8</a></p>
--	--	--





## 菊の瓦の理由とは

「瓦に菊が描かれています、皇室と関係があるのですか」  
まち歩きイベントなどでガイドを務めていると、時折こんなご質問をいただきます。質問してくださった方が指さす先には菊紋入りの軒丸瓦。菊紋といえば皇室の紋章ですよ。明治維新後には皇室以外での菊紋の使用が禁じられてもいたので、そんな疑問が浮かぶのも不思議ではありません。

まちを歩くと、寺社だけでなく商店や民家の屋根にも、菊紋入りの瓦がみられます。寺社の場合は確かに皇室との所縁から菊紋の瓦を使用していることもあります。商店や民家で皇室と関係しているというのはなかなか考えにくいでしょう。ではなぜ菊紋の瓦がこんなにもまちにあふれているのでしょうか。



菊紋の瓦

菊は延命長寿の象徴であることからそうした願いが込められてもいけば、皇室の高貴な紋にあやかりたいという思いもあるかもしれません。また、円形の中にシンプル

## 瓦を追うひと/「大ナゴヤノート」エディター 脇田佑希子

に描ける意匠ながら優美さがあるからというのも普及した理由として考えられます。それと、これはかつてどこかで見聞きした説なのですが、「防火の意味を込めた」とも。ただ、私はこの説を裏付ける文献などを見つけることができず、その信憑性がずっと気になっていました。

ところが先日、ついにこのことが書かれている文献に遭遇しました。それは、名古屋城にまつわるさまざまな事柄が記録されている『金城温古録』。城内にあしらわれている紋についてまとめられた節に、次のような記述がありました。「菊花は水辺の仙草、因て是を附る也」。つまり、菊は水を好む植物であり、それゆえ屋根に菊を配することで火伏せにつなげたいというわけですね。

そもそもは葵の御紋について学びたくて紐解いた『金城温古録』でしたが、まさか菊紋の、探し求めていた解説に出会えるとは。長年のモヤモヤがひとつ、思いがけず晴れてスッキリしました！

### 参考文献

名古屋市教育委員会編（校訂復刻1984/原著出版1965）、名古屋叢書続編 第13巻 金城温古録(1)、愛知県郷土資料刊行会。

## お座敷すだれの修理・復元

株式会社 鹿田産業 松延寛

今からおよそ100年前、芥川龍之介や宮沢賢治が活躍した大正元年(1912年)に作られた「お座敷すだれ」が今も美しい姿のまま残っています。

「お座敷すだれ」を例に、天然素材ならではの経年変化によって生まれるものの価値についてお話しさせていただきます。

万葉集に詠まれるすだれの歴史は古く、奈良時代に遣唐使によって伝えられたと言われていました。後に貴族文化に欠かせない調度品として重宝され、現代では古来より続く伝統的な装飾品として使われています。

ただ、若い方にとっては馴染みのないもののようなのです。

「新聞にくるまったボロボロのすだれが出てきたけど見に来てくれない？」祖母が使っていたもので、子供の頃に母と一緒に見た記憶があり、懐かしくなり同じものを作ろうかなと思ったそうです。

縁布は剥がれ落ち、房は色あせ金具はサビて、長い時間眠っていたような感じでしたが、竹ヒゴに破損は見られ

ず、埃をはらうと変色した美しい竹の節模様を見る事ができました。

縁布や金具は経年劣化により価値を見出すことは難しいですが、竹ヒゴについては、強度や弾力性、耐久性といった素材ならではの特性と四方が縁布で覆われているという事もあり、割れて破損する事はほとんどありません。

この竹ヒゴという天然素材の経年変化こそ「美しいすだれ」の大きな特徴で、自然に色濃く変色したすだれは「美しいすだれ」と評価され、価値として捉えられます。

職人を見ると、新しい一枚を作る時は当然意気に感じるようですが、修理品を預かったその目もまた、時間の経過に思いを馳せているようでいいものです。

竹は持続可能なもの。「お座敷すだれ」は職人の手により修理で蘇ります。

汚れた竹は洗い流し、破れた縁布は縫い直す。色あせた房と金具は付け替えて、息を吹き返した「お座敷すだれ」は更に100年ゆっくり時間をかけ変化し続けていきます。



足踏み織機での織り直し



足踏み織機での織り直し



縁布生地の縫い直し



すだれ商品

## 4 県外視察報告—愛知登文会独自事業（2021年度）

## 三重県 伊賀市

愛知登文会情報担当 小栗真弥

2021年12月14日に保存活用事例視察（三重県伊賀市）に参加させていただきました。今回の視察では、午前には三重県の所有者の会である「さんとうぶん」の新会長である長谷園さんを訪問し、午後には伊賀市街を巡りました。

長谷園さんは「かまどさん」でも有名な伊賀焼の窯元です。16段の登り窯や大正館、主屋、別荘など合計14件が登録文化財になっておりさまざまな種類の建造物を一度に見ることができ、また大正時代の建物で伊賀焼の湯飲みでコーヒーを飲んで一休みしたり、店頭販売で伊賀焼のお土産を買ったりと、どんな人でも楽しめる素晴らしい活用のされ方で感動いたしました。

伊賀市街は伊賀上野城の城下町として栄えた地域で、最近では伊賀忍者でPRしていることでも有名でしょうか。上野市街ガイドの滝井さまにガイドをしていただきながら赤井家住宅、旅館薫楽荘、菅原神社、上野文化センター、一乃湯本館をはじめ10件近くの登録を回ることができました。赤井家住宅さんも立派な邸宅で、こちらは行政によって管理運営されており市民が気軽に利用できるような場所として活用されていました。水回りや蔵などは、誰でも使いやすいようにしっかりと修繕されており、習い事の場所としても活用されているとか。

今回の視察の中で、私自身も文化財に住んでいる身として、所有者自身が文化財建物と共に事業をしながら残していくか、直接的には所有者の手を離れて行政と共に活用されるべきなのかを改めて考えさせられました。どちらも多く苦労や課題があるかと思いますが、どちらにしてもお金はかかりますし、存在を知ってもらう必要があり、見に来た人を楽しませるような工夫が必要になるのは間違いありません。私の研究分野としても、所有者としても、登文会の情報担当のメンバーとしてもこのあたりを解決する方法を模索したい所存です。

さて、このような今回の視察参加者は17名で、正会員と賛助会員の方で普段は顔を合わせない方とも交流できとても有意義な視察になりました。次回もぜひ参加したいです！



長谷園の登り窯の前で記念撮影



## 文化財に響け、鼓の音色

愛知登文会理事 箕清澄

戦前の木造小学校の姿を今に伝える登録文化財「桐林館」で開催される「こどもびな」。

登録文化財「桐林館」がある阿下喜は762mm（ナローゲージ）のレール幅で知られる三岐鉄道北勢線の終着駅。名古屋から桑名で乗り換え約2時間、三重県いなべ市北勢町にある町です。

この阿下喜では昭和の街並みが活かされ、その一つ最近建て替えて解体された阿下喜駅が街中に旧駅舎が復元されるなど、街を盛り上げる取り組みが続いています。

この阿下喜を舞台に開催される「あげきのおひなさん」は、下町の情緒が残る阿下喜のまちなかで町内の店舗や一般の家庭、約100軒でおひなさまを展示します。

訪れる人も年々増え、地域の自慢のイベント行事になっているので、ご存じの方も多いと思いますが、その中でもこの数年ひときわ目を引くイベントになったのが「こどもびな」

の謡とお囃子です。

お囃子は童謡『うれしいひなまつり』に登場する五人囃子の演奏のことで、五人囃子は大人顔負けの演奏をする元服前の少年能楽師です。

そのおひなさんの五人囃子にも負けられないような「こどもびな」たちのお囃子を観て、やりたい、やらせたいという親子も増え、訪れたお客さんだけでなく街の人たちのステイタスになっているのは、伝統文化を活用して文化財の活用法として文化財所有者としても理想に思う姿でありこれからも末永く続くイベントであってほしいと願うばかりです。

今年はコロナ禍で別の会場となりましたが、可愛らしい出で立ちの子供たちが奏でるお囃子は「あげきのおひなさん」に花を添えます。

来年はコロナが収まり、「桐林館」でこの子供たちの奏でるお囃子の音色が、もっと多くの人の心に響くことを願っています。



## 編集後記

2021年度の各種事業は、会場開催とオンライン開催を併用する形で行いました。会場開催のみ、オンライン開催のみよりも多くの参加あり、大変嬉しかったです。今年は皆様とお会いできる機会が増えることを願っています。

さて当会では、会の設立以来途切れることなく文化庁より補助金をいただけてきましたが、2022年度はこれまでの補助事業の総括や評価を行う期間として、補助金をもらえません。予算としては大幅に減りますが、これまで以上に精力的に活動していきます。ぜひご協力をお願いします。

## 愛知登文会ニュース 第32号

発行日：令和4年4月25日

発行者：愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会  
〒460-0003 名古屋市中区錦3丁目6番15号先  
名古屋テレビ塔株式会社内

TEL 052-971-8546 FAX 052-961-0561

E-mail info@aichi-tobunkai.org

HP http://www.aichi-tobunkai.org

Facebook @aichi\_tobunkai

Twitter @aichitobunkai

Instagram aichitobunkai

LINE  
(自動応答)